

ウメト インフォメーション

引用 : 日経 / 化学工業 / 燃料油脂 / 新聞展望 / 他 ()

2020年 12月 17日 担当者: 若山

月次で会合開催へ

OPEC 予想外の展開に対処

【ニューヨーク17日特約】2021年の石油市場の行方について言えることは、不透明でも確実なことがないことだ。この先行きがまったく見えなことが需要と供給の両方を弱かしてあり、OPEC（石油輸出機構）プラスの各関係は先々週、第1四半期（1-3月）に起こり得るさまざまな予想外の展開に対処するため、月次の会合を開催することによって迅速に対応するという選択肢を受け入れた。

各関係の妥協によるような契約を結んでいり、それぞれの承認の。向上きにも下向きもとの200万バレルに微調整もできる。そのままたしておくと決まった。同案の決定は、会合前に採択が予想されていたサウジアラビア主導の現行の770万バレルの減産を3カ月延長するとの案をしのいだ。

定例の会合はより活発で市場管理に敏感だが、OPECプラスの考えを予測するのは難しい。すべてのOPECの取引と同様に、やっかいなのが細部に多いからだ。サウジのエネルギー相アブドゥルアジズ王子は先々週の会合の後「われわれは、それぞ

れの方角を微調整できる。先々週の会合で、OPECプラス内

ウジ、ロシア、UAE などでは、各関係の食の進みにより、これらの脅威はさらに悪化した。しかしこれらの不安は、国営の主要な根拠である価格へ唯一影響を与えることのできる市場管理を、各産油国が必要としているという大層な事実を無視している。

しかもOPECプラスには効果的な市場管理の確かな実績がある。先々週の会合で、協定を4年間支えたロシアとサウジのパートナーシップの違いが明らかになったが、協力が制は継続するだろう。

今の大きな問題は、政策の主な推進力は何か、そしてそれがどのように実施されるかという点だ。

新しい取り決めに對して、最初の会合は暫定的に2021年1月4日に予定されており、各代表者はすべての目が需要と価格に集まるだろうと述べている。原油価格が現水準

わりまで延長された。グループがどれほど一生懸命にこれを実施するか、もしくはロシアを、これまで避けてきた補正案に同調させるかという方向は不明だ。

OPECプラスは、各産油国の耐久性と有効性を疑う者までに落ち着かせている。そのような扱いにたいしては、組織が生産量に関する規制をどれだけ長く続けることができるかという疑問に思いつく。だが、むしろ「だれも減産を好まないが、そうしない方がいいのだから」という問いかけのほうがより好ましいかもしれない。

しかし減産の必要性は市場管理の根本であり、各産油国はより高い収益を求めている。EIG（エナジー・インテリジェンス・グループ）のR&A（リサーチ・アンド・アドバイザリー）部門は「新しい合意は、世界の膨張した石油在庫を引き下げるのに十分なはずだ」と試算している。R&Aは、在庫が2021年上半期（1-6月）に約150万バレル、下半期（7-12月）にも小幅の100万バレル増減に減少すると見込んでいる。

OPECプラスは今までさまざまな妨げに対応してきた。たとえばEIGの仮の評価によると、10月の減産順守率は100%を下回ったが、11月は4%上昇したという。これらの順守率の上昇は、OPECにおける自らの達成が以前遅れていたロシア、ナイジェリア、アンゴラに上るもので、自国の経済への減産による負担にかなりの不満を持っている各国でさえ、加盟国として同盟を維持しようとしていることを見ることがない。大抵のことだ。議論してやる。

（訳）燃料油脂新聞

ウメモト インフォメーション

引用 : 日経 / 化学工業 / 燃料油脂 / 新聞展望 / 他()

2020年 12月 17日

担当者: 岩崎

11月世界の原油供給量増加

【ニューヨーク】世界の原油供給量が11月、前月から増加した

ことが明らかになった。情報筋によると、前月比100万バレル増の9330万バレルに達したという。

OPEC（石油輸出国機構）加盟国のナイジェリアとイラクが減

産した一方、リビアの増産のほか、米国が100万バレルまで、前月とくらべて300万バレル増えたことが主な原因。

カナダが、前月比約100万バレルそれぞれ増加し、全体の供給量を押し上げたという。しかし需要が供給量を220万バレル上回ったため、世界の原油在庫は減少したという。

ウメモト インフォメーション

引用 : 日経 / 化学工業 / 燃料油脂 / 新聞展望 / 他()

2020 年 12 月 17 日

担当者: 榎野

フェノール、国内ひっ迫

1社なお停止、韓国玉不足

フェノールの国内需給がひっ迫している。11月中旬に1社が稼働停止に陥った。また、最多輸入元の韓国では大手の火災事故の影響で輸出余力が薄れ、日本の不足分を補えるだけの玉を確保できるかは懐疑的。すでに供給調整が行われているように、来年1月頃までタイトな状況が継続するとの見立てが出ている。

フェノールは国内2社の供給だけでは内需を賄い切れず、一定量を輸入に頼っている。今年はコロナ前まで需要は安定していたが、年央から低迷。ただ、1社の定修が予定より少し長引いたり、余剰を輸出で捌いたりしたこともあってウエルパラスが保たれた。

車生産に左右される主要誘導品のビスフェノールA・ポリカーボネートチエーンが復調しているほか、建築資材に使われるフェノール樹脂も緩やかに回復しているようだ。こうしたなか、1社が設備トラブルで11月中旬から稼働停止を余儀なくされた。12月中旬に再開すると目されるも、現在も停止したまま。別の1

社が定修中だったこともあって需給が急速に縮まった。停止中のメーカーは玉の調達に奔走しているようだが、韓国大手は11月上旬に発生したクラッカの火災事故で原料不足に陥り、フェノールの稼働が約6割にとどまっている。中国や台湾からの輸入も検討しているようだが、需給ひっ迫を抑え

るだけの玉を確保できるかは不透明。国内他社に融通を要請しているようだが、他社も不足分を全量カバーできていないもよう。応援が可能になっても東西に際がる運搬も発生し、車線りが容易ではないと予想される。また、フェノ

ールを運ぶローリー車は保温設備付きで台数が限られる。出荷再開が見込まれる1月頃までは、東西で供給調整が行われるとの見方が浮上している。国内供給が万全にならない限り、ひっ迫は解消しない公算が大きい。

ウメト インフォメーション

引用 : 日経 / 化学工業 / 燃料油脂 / 新聞展望 / 他()

2020年12月17日

担当者: 榊野

カオリン、実需悪化

コロナが影響 国内値上げも様子見

カオリンの需要は、コロナ禍によって打撃を受けている。主力のコート紙向けなどが各国のロックダウン（都市封鎖）により悪化。国内でも、米などの主要サプライヤーが打ち出してきた値上げの積み残し分などを今

年再び転嫁する予定だったが、実需の悪化で様子見せざるを得なくなっている。

カオリンはコート紙向けを中心に需要が世界的に縮小するなか、2015年以降メインサプライヤーが英イギリスと伯カダム、米シールの3社に絞られた。コート紙消費量は電子化の波を受けて

エチレン急落下げ

9月輸出物価指数

日本銀行が公表した9月の輸出物価指数（速報値、2015年平均＝100）によると、エチレンが前月比5.1ポイント下がり、57.6となった。為替レートは中心相場の月平均で1ドル＝105.74円。前月比0.30円の円高だった。

年々縮小しているが、今年はコロナ禍で一段と悪化。テレワーク推進を受け、ペーパーレスの動きが一気に広まったため。各社ともコロナ禍の影響を受けつつも操業を継続しているようだが、採算是正に向けた製品ラインアップの変更など事業体制の効率化に動いている。

る。ペーパーレスの生活様式はコロナ明け後も定着するとみる向きが多く、「世界的な需要の縮小は避けられない」（市場関係者）。

内需は通期で約3割減ると予想されており、製紙業界の工場再編もあるため、ますます厳しい環境になるとみられている。

ナフサ生産量

4.1万キロ減少

石連週報

石油連盟がまとめた石油製品統計速報（12月6～12日）によると、ナフサの生産量は23万4274キロで、前週の27万5398キロから4万1124キロ減少した。在庫量は136万9907キロで、前週の128万8559キロから8万1348キロ増加した。

ウメモト インフォメーション

引用：日経／化学工業／燃料油脂／新聞展望／他（ ）

2020年12月17日 担当者：榎野

余すことなく有価物に

機能性成分やバイオ燃料

フアイトケミカル

米ぬか由来の未利用油

東北大学発ベンチャーのフアイトケミカルプロダクツ（仙台市、加藤牧子代表取締役）は、米ぬか由来の未利用油を完全に再利用する技術を開発し、実証生産を開始した。イオン交換樹脂法を用いてスーパービタミンE（トコトリエノール）などの機能性成分、バイオ燃料となる脂肪酸エステルを取り出す。スーパービタミンEなどは食品・化粧品の新規製品の研究開発向け試薬として販売する。未利用油を再利用するビジネスモデルを確立し、イオン交換樹脂法を国内外で普及していきたい考え。

イオン交換樹脂法 応用

米ぬかは国内で年100万ト程度発生し、約3分の1が米油向けに使われている。その精製工程で未利用油が出てくるが、合理的な再利用法がなくボイラーを使って熱回収しているのが実情。

イオン交換樹脂法の応用に取り組んできたのは、東北大学の北川尚美教授。未利用油から脂肪酸エステルを取り出すのが目的だった。水処理などで使われるイオン交換樹脂法を油中で利用できる

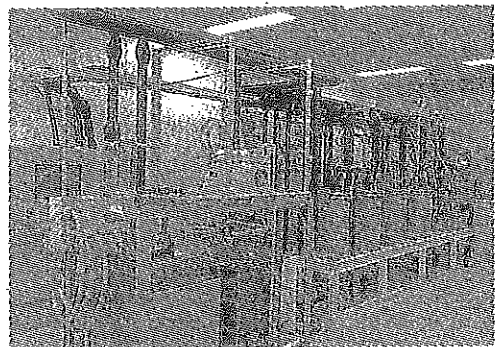
条件を見いだすとともに、米ぬか由来の未利用油から機能性成分を分離することに成功。装置開発を担当した加藤氏らとともに2018年、フアイトケム・プロダクツ（20年8月にフアイトケ

ミカルプロダクツに社名変更）を立ち上げた。今年7月、中小機構・東北大学連携プロジェクト（T-Bi）内に毎時20トの未利用油を処理できる実証工場を稼働させた。未利用油にエタノールを加えて陽イオン交換樹脂に通し

て主成分の非可食油（脂肪酸）を脂肪酸エステルに変換。その後、陰イオン交換樹脂を通して機能性成分を吸着させるとともに、残った油脂成分からも脂肪酸エステルを取り出す。イオン交換樹脂は再生して繰り返し利用が可能だが、反応・分

離条件は50度C・大気圧下と非常に溫和。分離したα-トコトリエノール、γ-トコトリエノール、ビタミンE（α-トコフェロール）を食品・化粧品の研究開発向け高純度試薬として販売。トコトリエノールは高い抗酸化作用などの特徴があるが、現状はパルミト酸由来で非常に高価。安定的に供給することで顧客を開拓し需要喚起につなげる。このほか副生するパラフィン（初級植物由来製品として化粧品原料などに販売すること）を予定。脂肪酸エステルは発電用燃料として21年の実用化を目指す。

トコトリエノールの本格生産を目指して宮城県内に新工場を設置する検討を進めており、21年内に計画を固める。処理能力は毎時100ト程度を想定し、24時間操業体制を敷く方針。また、イオン交換樹脂法の量産体制を構築することで、他の未利用油の再利用プロセスとして普及させていきたい考え。



イオン交換樹脂法による製造設備（上）とイオン交換樹脂法による食品・化粧品向け供給装置（下）

よを開発する。イオン交換樹脂法による製造設備（上）とイオン交換樹脂法による食品・化粧品向け供給装置（下）